

糸島市立

伊都国歴史博物館

紀 要

第5号



原始・古代船の推進具を考える(下)

～縄文～古墳時代の推進具集成～

.....江野道和

長野川下流の弥生～古墳時代の遺跡と遺物

～東地区周辺の遺跡と博物館収蔵資料から～

.....岡部裕俊

2010



序

本年度は、当博物館にとって節目の年になりました。平成16年10月に閉館した当館は、多くの皆様を支えられ、おかげさまで5周年を迎えることができました。

そして、本年1月1日に旧前原市・旧二丈町・旧志摩町が合併して新しく「糸島市」が誕生したことに伴い、当博物館の名称も「伊都国歴史博物館」から「糸島市立伊都国歴史博物館」へと改められました。

当博物館は、糸島地方の歴史・民俗・文化に関する学習及び情報発信の拠点として、市民の皆様はもとより県内外の幅広い皆様に親しまれておりますが、これに応えるべく3名の学芸員が展示の企画・準備を行いながら、あわせて啓発活動・資料調査・研究活動を展開しています。本年度も2本の調査研究の成果を本紀要にまとめることができました。

最後になりましたが、本紀要の作成にあたってご協力をいただきました関係各位に衷心よりお礼申し上げます。

平成22年3月31日

糸島市立伊都国歴史博物館
館長 榊原 英夫

目 次

原始・古代船の推進具を考える(下) ～縄文～古墳時代の推進具集成～ (江野道和)	1
長野川下流の弥生～古墳時代の遺跡と遺物 ～東地区周辺の遺跡と博物館収蔵資料から～ (岡部裕俊)	12

原始・古代船の推進具を考える(下)

～縄文～古墳時代の推進具集成～

江野道和(伊都国歴史博物館)

I はじめに

「原始・古代船の推進具を考える」(上)では、研究史と權の分類、(中)では、出土した權(權状木製品を含む)・竿などの推進具の集成を行った。今回の(下)では、前2回分の資料を使って本稿のまとめを行いたい。

II 分類方針

(1) 分類と方法

權の形状および長さの違いについては、大きくわけて使用方法、地域、時期などの要因が影響を与えていると考えられる。まず、使用方法については、推進力を与えるべき船の形状と大きさ、果たすべき役割(推進用、舵用など)が考えられ、地域性については、湖沼や内海などの波の穏やかな場所、流れの速い河川、波の荒い外海など、時期については縄文から古墳時代にかけて、形状の差や装飾の有無がみられるかなどがあげられる。ここではまず、形状について時代的に分類を行い、つづいて使用方法や地域、時期の差について言及していきたい。

(2) 形状の分類

【方形・長方形】(第1図)

水かきの平面形態が方形～長方形を呈する權を選別し、時代別および地域別に分類した(『紀要』3号「原始・古代の推進具(上)」P17の分類では、水かきの平面形状G-a~b'に相当する)。まず、形状について大きく4種類に分類した。長方形で肩が張り、角が円いタイプ(★)、続いて、肩部がナデ肩で、水かきの先端部が直線に近いもの(■)、幅に対して長さがあり、長大となるもの(◆)などがあり、これ以外の★のものより円みをもつものや台形に近いものについてはその他としてまとめた(▲)。

時代別にみると、縄文時代には、★が主に山陰から琵琶湖周辺にかけて分布し、◆は琵琶湖周辺から北陸で出土する。このうち、★に属する島根大学構内(468・469)と夫手(479~482)の出土品は大きさに差があるものの、肩部と先端部の形状

が類似し、柄と水かきの軸線が偏る(E-b)などの共通点がみられる。また、琵琶湖周辺で出土する◆のうち、元水葦(401)、松原内湖(385)、入江内湖(220)においても形状などに共通点がみられる。

つづいて弥生時代に入ると、■が北部九州に集中し、東海付近にまで広がりをみせるとともに、長大形でナデ肩のもの(506・509)や肩の張るもの(185)、先端部が広がり台形形状を呈するもの(64・210)も散見できる。このうち、■をつけたものでは、福岡県の長行でまとまって11本が出土しており(510~513・517・519)、峠で形状が類似するものが発見されている(521)。また、拾六町ツイジ(508)や岡山県南方(492)、古墳時代の夜臼・三代(524)などは、肩部の形状と柄と水かきの軸線が偏る(E-b)などの共通点がみられる。

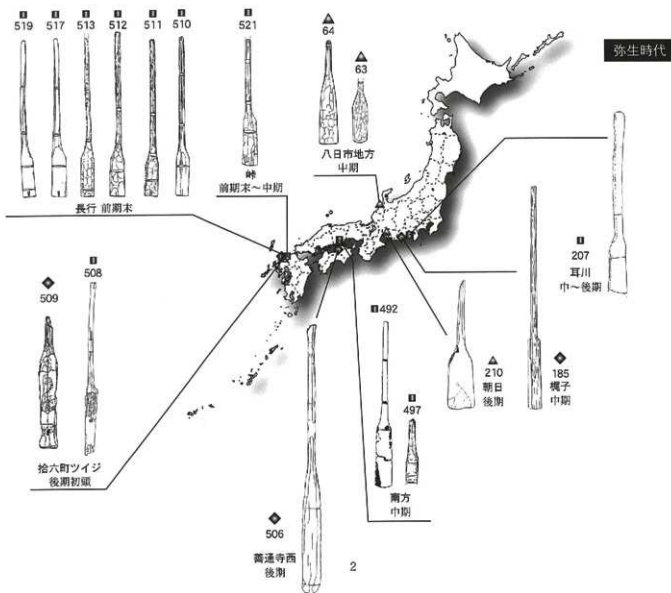
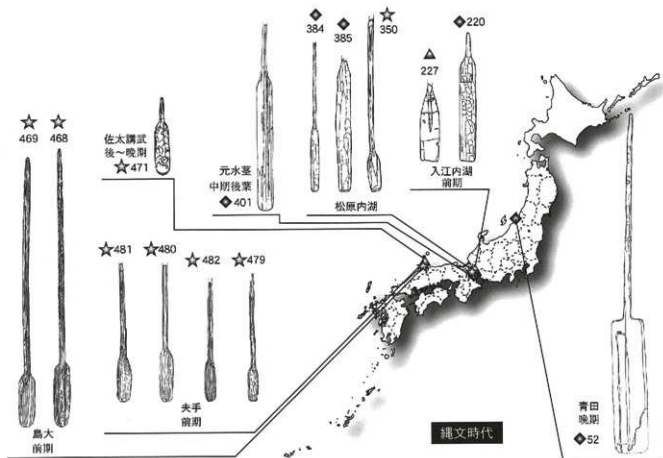
最後に古墳時代についてみると、長大形の中でも特に大きなものが出現する。兵庫県の中長越(435)では全長245.2cm、宮城県の中在家南(9)では全長260.4cmを測る。また、縄文～弥生時代にみられた円みをもつもの(420)や台形形状のもの(58)なども引き続きみられる。

【長方形・楕円形・三角形】(第2図)

ここでは、第1図の「方形・長方形」と第3図の「楕円形・三角形」の中間に位置する形態で、狭長な權を選んだ。水かきの平面形状の分類においては、長方形(b・b')、楕円形(c)、三角形(e')の範囲に含まれる。

各時代別にみていくと、縄文時代には鳥浜貝塚(124・125)や松原内湖(388)で幅が狭い楕円形を呈し、最大幅が先端部寄りなのが出土している。また、角江(178)では、水かきの先端が尖り、柄が偏ったものが出土しており、弥生時代の南方(499)などに類似する。また、偏りがあるものの、水かきの長さが少し短い例として、佐賀県の東名(526)や福島県荒屋敷(20)などが挙げられる。

続く弥生時代に入ると、狭長な楕円形と先端が尖るものが広く分布するようになる。まず、前者については瀬戸内海～東海地方にかけて分布し、角江



凡例

- ☆ 夫手タイプ
- 長行タイプ
- ◆ 長大形
- ▲ その他



※ 図中の番号は「原始・古代船の推進具を考える(中)」の原始・古代船の推進具一覧を参照。

第1図 方形・長方形の水かきをもつ權の分布

(160・173～175)や梶子(187・189)、西岩田(415)、鬼虎川(418)などがある。また、時期は弥生～古墳時代へと跨るが、福岡県の金山や難川、鳥根県のタテチョウなどでも出土例があり、分布範囲がさらに広がる可能性がある。

次に、後者の先端が尖るものについては、四国～東海地方へかけて分布しており、普通寺西(505)や南方(499)、西岩田(414)などで出土する楕円形に近く、先端が尖るものと、梶子(190～192)のように側面が直線的に延び、先端が鋭く尖るものと、大きく2種類に分けることができる。また、普通寺西(505)と梶子(190～192)の中間の形態として下郡桑苗例(529)が挙げられ、縄文時代の松原内湖例(386)にも類似する。このほか、水かきの幅が著しく狭い長方形を呈し、柄との境界が明瞭でないものが津島(500)や日暮・松林(503)などで出土する。

最後に古墳時代に入ると、前時代の角江でみた楕円形のもの引き続き使われており、琵琶湖周辺から東海地方にかけてみられ、入江内湖(234・236)や松原内湖(364)、伊場(179)、山ノ花(196)などで出土する。また、先の尖るものも下田(426)、市川橋(13)などに引き継がれ、幅が著し

く狭く長方形を呈するものも袴狭(434)や山ノ花(198・199・201)などでみられる。このほか、先端が尖るものは、静岡県の大谷川や時期決定は難しいもの、大阪府五反島例などがある。

【楕円形・三角形】(第3図)

ここでは、水かきの平面形が楕円形(c')や三角形(e)をもつ權の分布をみていく。まず、時代別にみると、縄文時代においては、日本海側の新潟～福井県にかけて三角形の水かきが分布し、鳥浜(76)や青田(51)などで出土する。また、円形のもの、北海道と滋賀県の琵琶湖周辺でみられ、このうち、松原内湖例はやや角張った円形となる(389～391)。

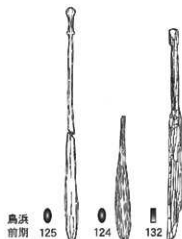
続く弥生時代に入ると、稗田(477・478)で先端が鋭く尖った權が出土しており、古墳時代の五反島例に類似する。また、瀬名川(150)や角江(153・168)では、ややくびれた形の三角形となる。縄文時代の石狩紅葉山(1)でみられた、ナデ肩の円形水かきについては、北陸～近畿にかけて分布し、江跨(136)や高宮八丁(422)、鬼虎川(416)、池上(428)などでみられ、古墳時代の大谷川(145)に類似があり、石川県三引(67)では先

凡例

▭ 長方形 (b,b')

○ 楕円形 (c)

▽ 三角形 (c')



鳥浜前期 125

124

132

▽ 49
青田
晩期

縄文時代

▽ 178
角江
後～晩期

松原内湖

▽ 386

○ 388

▽ 529
下部島苗
前～中期

弥生時代

○ 174
後期

○ 173
後期

○ 175
後期

○ 160
中期

角江

○ 418
鬼虎川
前～中期

▭ 500
津島
後期

▽ 505
蕭通寺西
後期

▭ 503
日暮・松林
弥生後～
古墳中期

○ 495

▽ 493

▽ 499

南方
中期

○ 415

▽ 414

西岩田 終末期

▽ 212
一色青海
中期

▽ 192

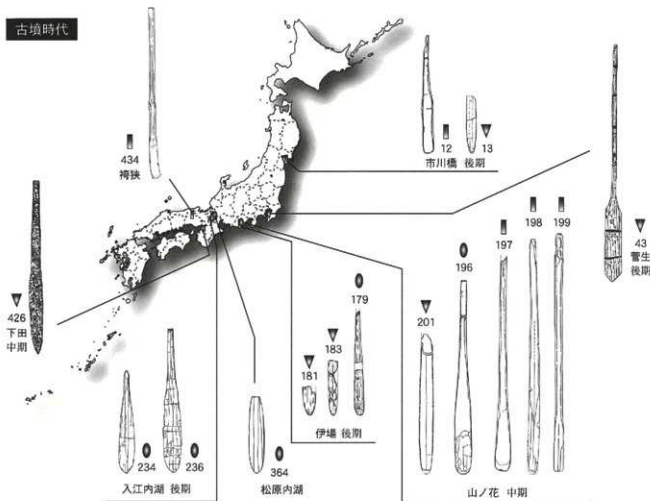
▽ 190

▽ 191

○ 187

○ 189

梶子 中期



第2図 長方形 (b・b')・楕円形 (c)・三角形 (e')の水かきをもつ壺の分布

端がやや尖る壺が出土している。このほか、北陸～山陰にかけての日本海側では、円形に近い水かきが出土しており、八日市地方(62)、青谷上寺地(第4図443・444)でみられ、古墳時代に入ると五反配(第4図490)などに類例がある。

(3) 壺の装飾について(第4図)

壺へ装飾を施す箇所としては、握り手である撞木とその周辺、水かき部分があり、ここでは、それぞれについてみていきたい。

まず、縄文時代をみると、北陸から山陰にかけての日本海側と千葉県において、いわゆる軍配形や羽子板状と呼ばれる撞木が分布する。まず、北陸では、青田(49)、真脇(70)、鳥浜(83・71・125・126)があり、関東では旧新田(31)がある。大きく分けると、高さが低く、頭部を平坦に作り出すもの(49・126)、高さがやや高目となるもの(70・71・83・125)、角張るもの(31)とに分けられる。

弥生時代に入ると、山陰から北陸、琵琶湖周辺、東北地方にかけて方形のものやT字状になるもの

のがみられる。江跨(137)や中在家南(10)では前者の方形のものが出土しており、このうち、中在家南例では左右がややくびれており、縄文時代の軍配形に通じる可能性がある。また、稗田(478)では、柄との境がなだらかで、明瞭な方形形状を呈しないものの、頭部および側面の形状をみると、江跨に類似するといえる。また、後者のT字状のものは、赤野井湾(258)などでみられる。

古墳時代には、袴狭(433)で、方形とT字の中間的な形態のものがみられ、五反配では、T字形が出土している。注目されるのは北部九州の夜臼・三代(524)で、尾鰭らしき形態となっている。握りやすさを追求した実用的な形態であるとともに、尾鰭に似せていることから豊漁を祈る祭祀の場で使われた可能性も考えられる。時期と地域差はあるが、弥生時代の青谷上寺地出土(444)の水かきに描かれたサメと思われる線刻や古墳時代の五反配例(490)に描かれた魚と思われる線刻などと共通するところがあるのかもしれない。

以上述べてきたとおり、壺に伴う装飾は、土器な

縄文時代

▽ 76
鳥浜
前期

松原内湖

● 389

● 390

● 391



後期

▽ 51
青田
晩期

● 1
石狩紅葉山
中期



凡例

● 楕円形 (c')

▽ 三角形 (e)

弥生時代

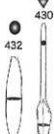
▽ 477

神田 中期

● 432

▽ 430

袴狭 後期



● 137

● 136

江崎 終末期



● 62
八日市地方
中期



▽ 150
瀧名川
中期



▽ 153
角江
中期



▽ 158
角江
中期



▽ 168
角江
後期



● 416
鬼虎川
前~中期



● 高宮八丁
前~中期



● 428
池上
中期



● 422
高宮八丁
前期

古墳時代

▽ 五反配
前期



● 145
大谷川



第3図 楕円形 (c')・三角形 (e) の水かきをもつ櫛の分布

どの資料と同様、例外は認められるものの、縄文時代に多く施される傾向にあり、弥生・古墳と時代を下るに従って失われ、方形やT字形、掘り部をやや太くしたもの(南方例-499、大谷川例-145)が一般的となっていく。

(4) 描かれた櫓と櫓状木製品の関係(第5図)

弥生時代から古墳時代には、船を象った絵画が土器や木製品を中心に、青銅器、横穴式石室、横穴などに描かれる。この船の絵の中には、櫓が描かれているものもあり、櫓の使用法や漕ぎ手の数、船の大きさなどを知る上で重要な手掛かりとなっている。ここでは描かれた櫓と櫓状木製品との比較を行うこととした。

まず、絵画の櫓をみると(第5図上)水かきの中央部に線を描くものと、線のないもの(唐古・鍵②)とに分かれることがわかる。これについては、櫓状木製品のうち、水かき部に柄の延長部の削り出しを持つもの(第5図下)と共通することについて、本稿の上)ですでに述べた。したがって、ここでは、他の要因についてみていきたい。最初に分布状況と時代とをみていくと、絵画との共通点がみられる櫓状木製品の分布は、九州から東北地方までみられ、時代も、縄文時代後期から弥生時代までの長い期間存続していることがわかる。木製品の性格上、腐朽のため失われたものが多いことを考えると、全国的に使われた形態であったことがわかる。つづいて、平面形態について比較を行うと、吉田知史氏が木葉状と呼んだ中でも、形態差がみられることがわかる。榎吉角田の櫓の水かきは先が尖り、中軸線が中央ではなく、少しずれる。樽味高木では、左側の6本(A)は長楕円形で細いが、もっとも右の櫓(B)は側面がややくびれ、先端が尖る。高井田横穴例では、右側の船先で円形の櫓を持つ。これらを実際の櫓状木製品と比較すると、長楕円形で細いものが第2・3図の楕円形(c・c')、くびれをもつものが第3図三角形(e')のうち、くびれをもつもの(150・153・158・168)、円形のもの第3・4図の楕円形(e')のうち、円形に近いもの(62・443・444)などと共通することがわかる。また、唐古・鍵①の左端と清水谷①の右上では、他の櫓と比べ、一回り大きい長楕円形の櫓が描かれていることがわかる。いずれも、方向を定める舵櫓であった可能性があり、高井田横穴の艦部分の櫓も同様の役割を持つと考えられる。

以上、絵画と木製品双方の櫓を比較してきたが、絵画には従来考えられているより、多様な種類の櫓が描かれている可能性が出てきた。これは、書き手が想像によって船や櫓を描いたのではなく、実際に船を見た経験のある人物が描いたからに他ならず、櫓以外の船体部分や装飾についても今後、出土資料との比較を通じて、細部にわたる検討を進めてゆく必要が感じられる。

III まとめ

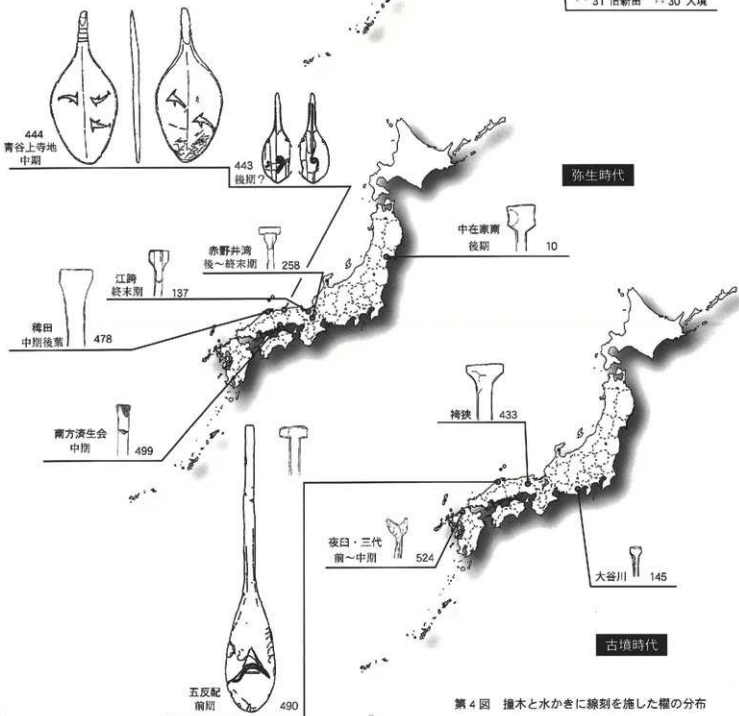
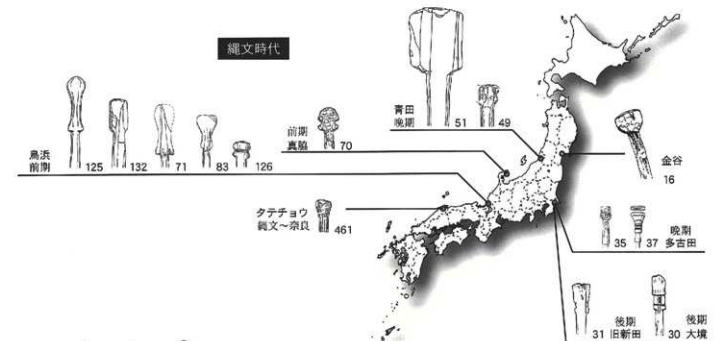
(1) 櫓の形状と長さ、使用方法について

櫓の形状と長さについては、本稿の冒頭で述べたとおり、使用方法・地域・時期などと深く関係していると考えられる。まず、ここでは、形状の分類と分布結果を受けて、地域と時期についてみていきたい。

最初に、第1図に掲載した方形～長方形の水かきのうち、縄文時代をみると、大きく夫手タイプと長大形とにわけられる。夫手タイプは主に、島根県に集中し、水かき部に対して柄が長いところに特徴がある。出土地は、夫手と島根大学構内が島根半島の南岸に位置し、前者が中海、後者が中海および穴道湖に近い立地にある。また、佐太講武員塚は島根半島の北部にあり、外海である日本海と内海である穴道湖の双方にほど近く、隠岐産の黒曜石をはじめ、九州や瀬戸内、朝鮮半島と関係の深い遺物が出土している。したがって、夫手タイプについては、波の荒い外海および静かな内海のいずれにおいても使用が可能であったと思われる。

これに対し、長大タイプは、琵琶湖周辺から北陸にかけて分布しており、このうち、琵琶湖周辺の元水葦・松原内湖・入江内湖の3つの遺跡からの出土品には強い共通性がみられる。水かき部が幅に対して著しく長い所に特徴があり、いずれも柄の部分が失われているため全長が明らかではないが、打櫓の一般的な長さから考えて、水かきの長さが全長の半分以上を占めているものと考えられる。琵琶湖周辺では、この長大な櫓と違うタイプの櫓も出土しているため、この形態が波の穏やかな湖特有の形とはいえず、使用方法から来た形態と考えられる。類例が少ないため、推測となるが、現段階では舵櫓の可能性を提示したい。これは、縄文時代にあつては極めて長い青田例(52)、島根大学例(468・469)などについても、同様の可能性が考えられる。

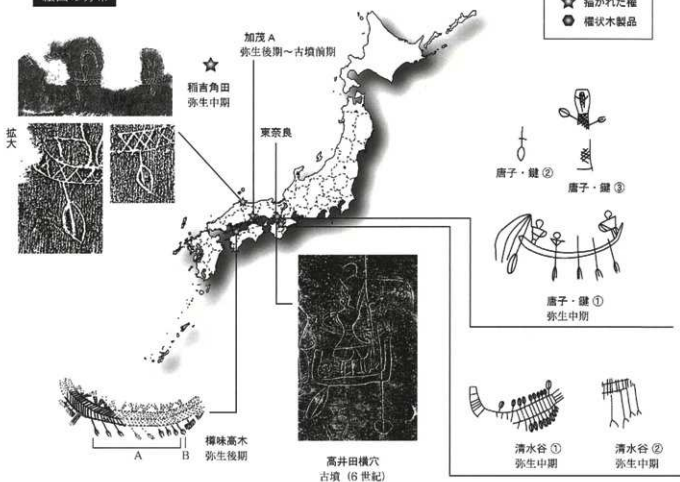
縄文時代



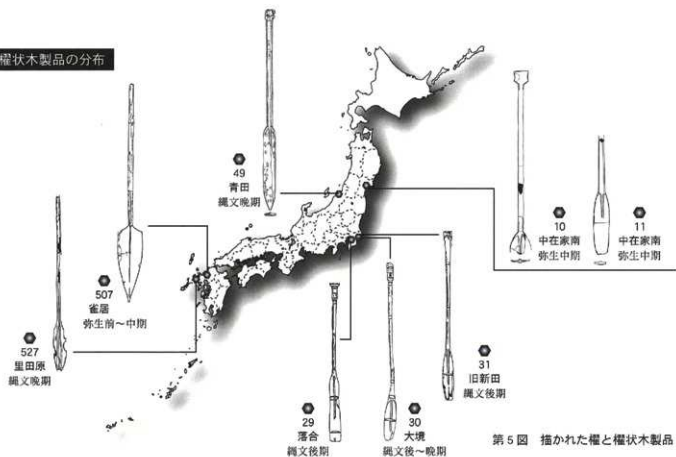
古墳時代

第4図 撞木と水かきに線刻を施した櫂の分布

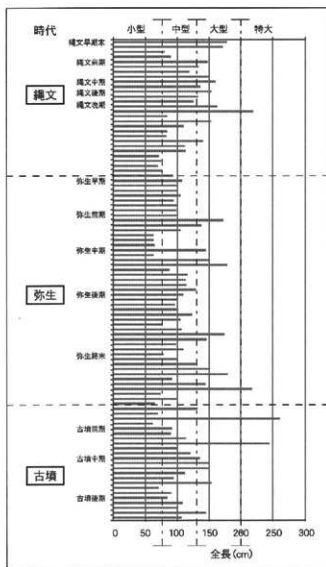
絵画の分布



權状木製品の分布



第5図 描かれた權と權状木製品



第6図 櫂木製品の全長比較図

弥生時代に入ると、長行遺跡（以下、長行タイプ）に代表される櫂が北部九州に分布の中心をもち、瀬戸内海、東海地方まで広がる。長行タイプの出土した遺跡の立地環境をみると河川にほど近いものが多い。長行では、紫川が近くを流れ、拾六町ツジでは室見川、善通寺西では弘田川の畔に立地する。したがって、流れのある河川での使用に適した櫂である可能性がある。

古墳時代になると極めて長大な水かきに太い柄を接続する櫂が出現する。長越例(435)、中在家南例(9)のいずれも、柄の途中に段を持ち、握りやすくする工夫が施されている。このような形状は打櫂に適さず、長櫂としての使用に適しており、大型の船を推進させるための櫂として使用したものと考えられる。

つづいて第2図に掲載した長方形・楕円形・三

角形についてみていくと、いずれの形態も縄文～古墳時代にかけて存続することがわかるが、このうち、注目されるのは、三角形のうち、先端が特に尖っているものである。梶子(190～192)、一色青海(212)、下郡桑苗(529)などは、後背湿地または河川に面した場所にあるため、水位の比較的浅い場所での推進に際して、水底に突き刺し、竿のように使用することがあったと思われる。

最後に第3図の楕円形・三角形についてあげる。まず、楕円形のうち特徴的なのはほぼ円形に近い水かきであるが、日本海側の八日市地方(62)、青谷上寺地(443・444)などで特徴的にみられる。また、三角形の内、稗田(477・478)と五反配例は形態が類似し、静岡県内では瀬名川(150)、角江(153・168)などで、くびれのあるものが集中して出土する。

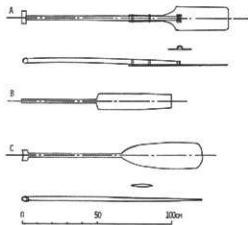
以上、みてきたように、夫手・長行両タイプやくびれのある三角形・ほぼ円形に近い楕円形など地域と時代を限り、特徴的な形態をもつものがみられる一方、全時代を通じて広範囲にみられるもの2種類があることがわかった。また、長櫂の初出例として現段階で古墳前期を捉えることができた。

(2) 船との対応関係

以上、櫂の形状と長さおよび使用方法の推定を行ってきたが、最後に推進すべき船との関係をみてゆき、終わりたい。

まず、縄文から古墳に至る船の大型化に伴う櫂の法量や使用方法の変化については、第1図で述べてきたとおり、長櫂と考えられるものが古墳前期に登場することから、少なくとも漕ぎ方に関する画期は当該期にみられる。しかしその一方、第6図の長さの比較表でみたとおり、櫂木製品の多くは、縄文～古墳時代まで一貫して1m前後の中型で打櫂であることがわかる。したがって、船の構造は単材刳舟から木材を組み合わせた準構造船へと移り変わり、多くの人員が乗り込み、外洋を航海するための大型船が出現する一方、沿岸部や河川・湖沼で日常的に交易や漁労を行う船については、単材刳舟、または小型の準構造船がその任を担っており、一貫して、打櫂による推進を行っていた可能性が高い。糸島市潤地頭給遺跡から出土した準構造船は、船の構造変化の過渡期にあって、従来の推進方法を採った船の一例といえる。

本稿により、従来は、櫂の形式について打櫂から



A ベーロン B サバニ C 南太平洋のカヌー

【図の引用】

柴田恵司・真野季弘・高山久明「手こぎ漁舟の研究—III
ベーロンおよびその類似船の船型」『長崎大学水産学部
研究報告』45号（1978年）p35 Fig3から引用。

第7図 現代に残る櫂の形状と長さ

順に長櫂、櫓と一元的に変化すると考えられてきたが、長櫂が登場した後も、打櫂による漕法が主体的に行われていたことがわかった。残念ながら、最後の櫓の初現期については出土資料の内に確実な資料を見出すことができなかったが、他の用途に分類されているか否かを含め、今後も引き続き注視していきたい。

（註）

註1) 櫂の番号は「原始・古代船の推進具を考える（中）」『伊都国歴史博物館紀要』4号（2009年）を参照。

註2) 山田芳和編『真脇遺跡』（能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団、1986年）では単配状の頭部という用語を使い、類例として福井県鳥浜貝塚や埼玉県寿能遺跡の櫂を挙げている。

註3) 網谷克彦編『鳥浜貝塚研究1』（福井県立若狭歴史民俗資料館、1996年）では櫂木を3種類に分類し、83を1類とし羽子板状、71と125を2類とし、1類を縦に伸張し、横に縮小した形態、126を3類とし、寸の詰まった8字形とする。

註4) 水かき部の突線は東日本における縄文後・晩期の特徴である。（新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団『青田遺跡』（2004年））

註5) 土器に描かれた櫂が木葉状を成すことから、形態の似た櫂を木の葉状の櫂と呼称した。分布域

は弥生中期では山陰から北陸にかけての日本海側で、後期以降になると、日本海沿岸諸地域で引き続きみられるほか、瀬戸内海周辺まで広がるとする。（吉田知史「善通寺西遺跡出土櫂の意義」『香川考古9号』（香川考古刊行会、2004年））

註6) 長崎・水俣・糸満・シンガポール・タイなどのベーロン船の櫂の長さは110cmから135cm。なお、ベーロン船の前後端に位置する漕手が持つ櫂は、他の櫂よりやや長い。（柴田恵司・高山久明「長崎ベーロンとその周辺」『海事史研究』38号（日本海事史学会、1982年）p38）

註7) 前原市教育委員会『潤地頭給遺跡』（2005年）

長野川下流の弥生～古墳時代の遺跡と遺物

—東地区の遺跡と博物館収蔵資料から—

岡部裕俊(伊都国歴史博物館)

I はじめに

糸島市の中央部を流れる長野川は、脊振山系の一峰、羽金山を源とし、女界灘に注ぎ込む総延長11.4kmの河川である。川の名は、「倭名類聚抄」に登場する怡土七郷のひとつ「名加乃郷(ながのこう)」に由来し、中流に鎮座する宇美八幡宮、雄琴神社は神功皇后伝説に由来する神社で、一帯の豊かな歴史を感じさせる。

流域ではこれまで縄文時代～中世・戦国期にかけての埋蔵文化財が各所で確認されている。とりわけ、昭和55～平成元年度にかけて下流域の広範囲にわたって実施された泉宮圃場整備では、未知の遺跡が多く発見され教育委員会によって発掘調査が行なわれた。

しかし、昭和60～昭和62年度に実施した東地区の調査成果の多くは本報告のままとなっており、長野川流域の歴史を解明する上での障壁となっている。

一方、出土品の中には学術上貴重な資料もあり、その一部はすでに博物館で展示し、要請に応じて他館の企画展に出品することもあり、資料の評価を定めるために調査地点の概要だけでも明らかにしておく必要があると考える。

そこで、本稿では東地区の弥生～古墳時代の遺跡を概観するとともに、すでに館内で展示している資料を紹介する。併せて周辺の、既報告の遺跡や出土資料も紹介し、長野川流域の弥生～古墳時代の地域様相を探る上での一助としたい。

II 地理的環境と遺跡の調査経過

現在の長野川は、河口付近で多久川、雷山川と合流して流れを北から西に変え船越湾に注ぎ込む。これは江戸時代の干拓を併せて流路の改修が行われたため、この河口の一帯は、古代においては深く入り込んだ内海の真っただ中であつた。

弥生～古墳時代の長野川の河口は宮地岳の南西裾、現在のJR加布甲駅周辺であつたと考えられており、史跡釜塚古墳は、ちょうど当時の海岸線近くの微高地上に築かれていたことになる。

東地区は、長野川の下流、釜塚古墳から1kmほど溯上した宮地岳の南裾の平野部を中心とする一帯をさし、その範囲は東西2.5km、南北1.5kmに及ぶ。

川の東西には標高10～30mほどのなだらかな低丘陵が広く展開するが、丘陵上には遺跡の数は少なく、まばらに古墳が分布する程度である。

弥生時代から古墳時代の集落遺跡は川の兩岸に形成された段丘斜面上に分布している。とりわけ川の左岸に多い傾向がみられるが、これは右岸に比べて左岸に段丘が発達したこと、肥沃な土地が多いことなどに起因するのかもしれない。

東地区の調査は、昭和60年10月～61年3月と昭和62年11月～63年2月期に集中して行われた。いずれの年度も泉宮圃場整備の追加事業として秋～翌春にかけて事業規模が大幅に拡大され、遺跡の分布が集中する段丘斜面が事業対象地とされたことも、調査面積の拡大に追い打ちをかけ、短期間で広範囲な調査を余儀なくされた。

以下で、未報告の東遺跡、東五反田遺跡、東若宮遺跡の概要と博物館収蔵資料を紹介する。

III 東地区における調査の概要

1. 東(ひがし)遺跡

東遺跡は長野川左岸の標高15～20mの微高地上に展開する弥生時代～戦国時代の集落遺跡である。縄文時代の石鏃、石刃なども出土しているが、遺構は確認できていないことから、近隣に当該時代の集落があつたものとする。

ちなみに、釜塚古墳の周囲からも縄文時代前期、晩期の土器や石器が出土している。こちらでも明確な遺構は確認できていないが、縄文集落の候補地の一つである。

調査地は8地点に及ぶが、小字では太田地区、下田地区の2地区にまたがっている。さらに未調査の北側にも拡大する可能性がある。弥生時代～古墳時代の遺構は、太田第1, 4、下田第1, 2, 4地点など主に段丘の西斜面を中心に南北450m、東



第8図 長野川下流域の航空写真(昭和58年撮影 1/10,000)

西300mの範囲に弧状に細長く展開している。

(1) 太田地区(第9図)

第2地点では弥生中期～後期の円形住居1棟分の柱穴列を確認した。

第3地点では弥生時代後期前葉の環状に配列される甕館臺4基と木棺臺1基を調査した。祭祀土壇が墓群の中心に位置する。1号甕棺は2個の大型広口蓋の口縁を打ち欠いたものを使用している。器表の劣化が著しいが胴上半部に赤色顔料が塗布されていたことが確認され丹塗土器であることがわかった。2～4号甕棺は甕や広口壺を転用した単棺の小児棺である。木棺も棺全長が1mほどで小児用と推定される。

また、南に隣接する第1地点の調査では西向き斜面で古墳時代前期の竪穴住居1棟が確認されているが、下田地区で確認された当該期の集落に連なる遺構と考えられる。

(2) 下田地区(第9図,第10図)

太田地区の北に位置する。4地点の調査を行ったが、このうち弥生～古墳時代の遺構が確認されたのは第1,2,4地点である。

第1地点から第2地点にかけて弥生時代後期～古墳時代中期の竪穴住居34棟、掘立柱建物2棟、甕棺臺2基などを確認した。

第1地点では弥生時代後期の竪穴住居を5棟、掘立柱建物1棟、古墳時代の竪穴住居4棟などを調査した。住居群最古の住居は6号住居でプランは円形。弥生後期初頭と考えられる。

古墳時代の住居のうち1号住居は正方形プランの住居で、二本の支柱穴が住居の南側のみに並ぶ特異な構造をもち、床面下の長楕円形小土壇から水鳥形土製品が出土した。9号住居では北半部が断面が浅いU字形に掘りこぼめられていた。埋土から古式の須恵器壘片と鍛冶滓が出土しており、当該期の鉄加工工場の可能性があり、注目される。

第2地点は、南北に長い調査区となった。遺構は調査区の西斜面側で遺構の分布密度が高い傾向がうかがえた。弥生時代後期の竪穴住居が13棟、掘立柱建物4棟、古墳時代前期の小児甕棺2基、古墳時代前期～中期の住居も10棟確認された。

このうち、12号住居内からは多量の古式土師器とともに、細線文タタキの陶質土器が出土している。

第4地点では、弥生時代後期の竪穴住居を4棟確認した。いずれの住居からも石錘が出土している。集落のなかでも当時の海岸線に近い北部に位

置していることから漁労に深くかかわったグループであったことをうかがわせる。

(3) 博物館収蔵資料

水鳥形土製品(第11図)

水鳥形土製品は、1号住居南東角の床下に掘られた長細い小土壇内で横倒しの状態で出土した。完形で、高さ10.0cm、長さ11.6cm、幅6.0cmを測る。ふくらとした胴部から頭をもたげ、頭頂部には低い鶏冠をつける。くちばしはやや大きめで、先端に向かってやや下重気味である。両眼とも眼を丸く、練描している。尾部は水平方向に短く開いている。また、胴部中央下に円錐形の脚部がつけられている。

胴部は中空で背中には垂直に立ち上がる口頸部を設ける。また、胸には円孔をあけている。

酒器など祭祀で用いる特殊容器として製作されたものと考えられるが、小形で手づくね仕上げの粗い仕上がり具合であることから、実用品としての使用には疑問符がつく。

ずんぐりとした胴体、大きく造りだされた嘴、短い鶏冠などからはオシドリ、カモといった水鳥が連想される。

この土製品が製作時期について、共伴の土器(第10図)から古墳時代前期後半(4世紀後半)と推定している。長野川河口の横島遺跡や釜塚遺跡では三韓式瓦質土器や伽耶系の陶質土器が出土しており、一帯で広く朝鮮半島との交流が展開されていたものと考えられる。

当時、伽耶地域では、水鳥の形を模した水差しが多く出土していることが知られ、その多くはカモなどの水鳥である。

韓半島の水鳥形土器と比較すると、基本形態は韓半島のそれによく似ており、この影響のもとに当地で製作されたと考えるのが妥当であろう。

陶質土器(第12図)

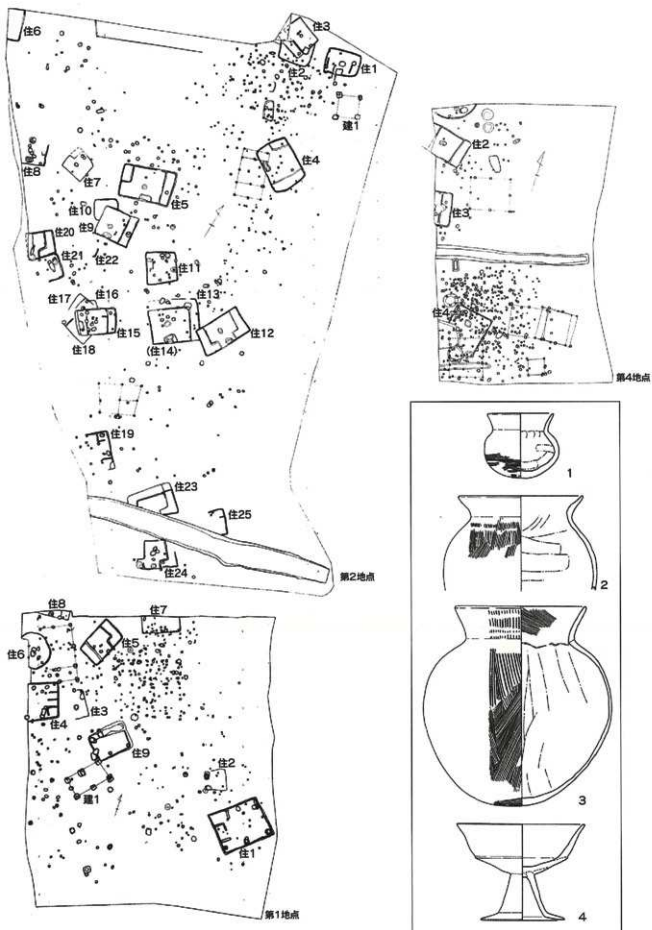
下田地区第2地点南部で検出した12号住居から出土した。

この住居は南北の住居の両小口側にベッド状遺構を付設したもので、住居内に大量の土師器が投棄されていた。陶質土器もそれらに混じって破砕された状態で出土している。復元すると、不足部は多いものの、全形を知ることができる。

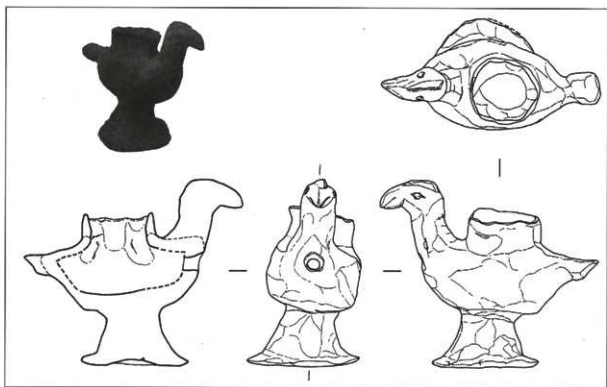
焼成時のひずみが著しいため口縁部は大きく波打つが、概ね高さ28.8cm、口縁径19.6cm、胴部最大径は31.2cmを測る。



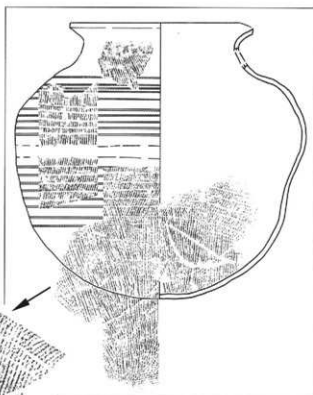
第9図 東遺跡調査地点位置図(1/2,500,地形は昭和60年当時)



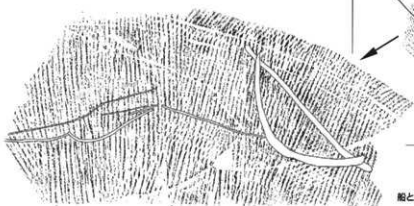
第10図 下田地区 第1,2,4地点の遺構配置図(1/500)と
第1地点1号住居出土土器(1/4)



第11図 下田地区第1地点1号住居出土水鳥形土製品(1/2)



船と渡杖の記号文の拡大(1/2)



第12図 東遺跡下田地区第2地点12号住居出土陶質土器(1/4)

外面は、細かな縄文文叩きが残り、肩部から胴中位にかけて15条の沈線がめぐる。

この土器で最も特徴的なことは胴中位のやや下方にへら状工具で三日月状の記号を描き、さらにその下方には細線で波状の沈線を描き足しているところにある。あたかも波間に漂う舟を表現しているように見える。内面は当て具の痕跡をナデ消している。

2. 東五反田(ひがしごただ)遺跡

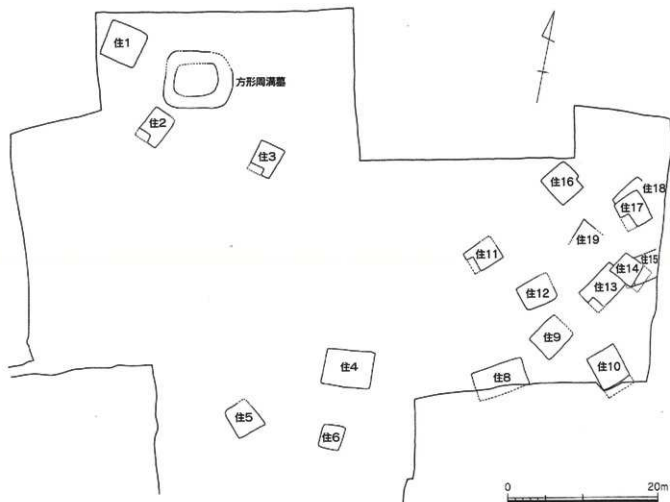
(1) 遺跡の概要

長野川の右岸に位置する集落遺跡である。長野川に突き出た微高地上にあり、東地区では唯一川

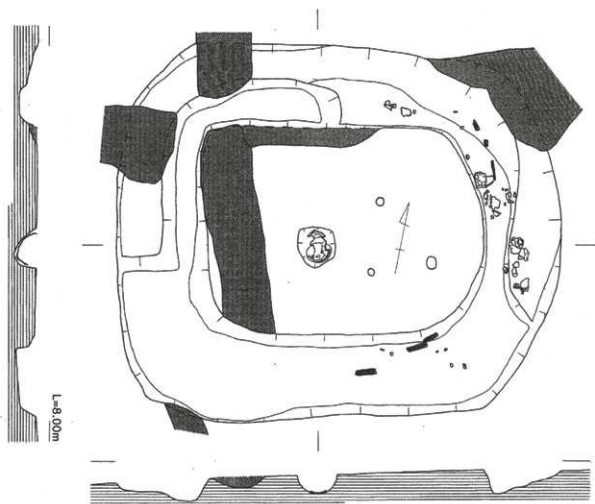
の右岸に営まれた集落である。遺跡を南北に分断する市道を挟んで南区を昭和60年度に南半部を、昭和62年度北半部を調査した。

弥生時代の集落遺構は東西×南北とも100mの範囲内に分布し、弥生時代後期の竪穴住居19棟、終末期の方形周溝墓と古墳時代前期の箱式石棺墓(8号住居内)が各1基が確認されている。

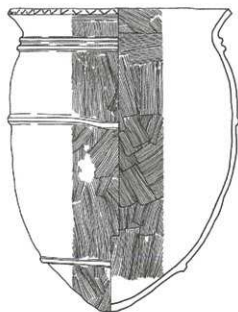
方形周溝墓は集落の北端で検出した。N-12°-Wに主軸をもつ単棺の大型甕棺の周囲に幅1.6~2.2m 深さ40~60cmの周溝がめぐる。周溝は外周から内向きになだらかに傾斜するが、内側の方形区画に向っては急勾配に立ち上がり、断面は「レ」字状となっていた。内区の掘りの規模は東西



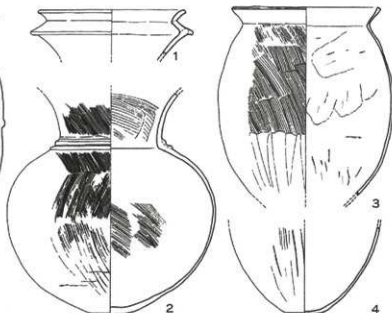
第13図 東五反田遺跡第3地点弥生時代遺構配置略図(1/500)



第14图 東五反田遺跡方形周溝墓実測図(1/80)



第15图 方形周溝墓主体部壁棺実測図(1/10)



第16图 方形周溝墓周溝出土土器実測図(1/6)

5.72m、南北4.24m、周溝を含めると東西9.15m、南北7.56mになる。甕棺内から刀子状の鉄片が出土している。

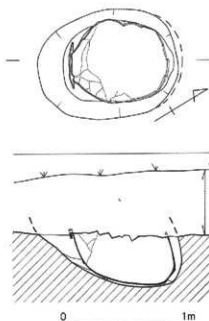
甕棺及び周溝出土の土器から、弥生時代終末に築かれたものと推定する。

(2) 博物館収蔵資料

方形周溝墓出土土器(第15,16図)

第15図は、大型甕棺で、外形は肩がやや張った砲弾形をしている。高さは80.4cm、口縁径57.0cm、胴径59.7cm。胴部に五条の突帯がめぐる。内外面とも粗い縦ハケで仕上げられる。底部の尖底化が進んでいる。

第16図は、周溝から出土した土器である。1は、複合口縁壺の口頸部。擬口縁から内傾した後、口唇部に向かって再び大きく外反する。2は、広口壺ないしは複合口縁壺の胴部で、底部の丸底化が進んでいる。3と4は甕で、いずれも器壁は内面からケズリによって薄く仕上げられ、4では、2と同様に底部の丸底化が進んだ状況を見ることができる。



第17図 東若宮遺跡出土土壺棺墓実測図(1/30)

3. 東若宮(ひがしわかみや)遺跡

(1) 遺跡の概要(第17図)

東二塚塚墓の南200mにある東にせり出した舌状の丘陵先端で造成工事のさなかに、甕棺墓が発見された古墳時代前期の合口甕棺墓である。周囲では他に甕棺等は発見されなかったため、単独で埋葬されたものと考えられる。

棺の埋葬角度は 度ほど。下棺は口縁部を打ち欠き、上棺が下棺の口縁を包み込むように被せられていた。棺内の埋土から上下の甕棺とは別個体の複合口縁の大型甕(図18-3)の破片が出土している。

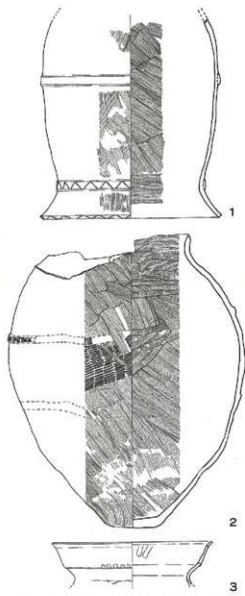
(2) 博物館収蔵資料

甕棺(第18図)

3個体分の土器があり、1、2は墓壇内で確認したもので、3は棺内に崩落した状態で出土したものである。

1は上棺である。最大径は胴中下位にあり、口縁端部とくびれ部の突帯に連続鋸歯文の刻み目を施す。残存高63cm、口縁径55.2cm、胴部最大径54.6cmを計る。

2は下棺である。外形は卵型で胴上半部は緩やかに弧を描きながらすぼまり、口縁部は如意状に外反するが端部は打ち欠き切除されている。高さは93.6cm、胴部最大径75cmを計る。



第18図 東若宮遺跡出土土器実測図(1/10)

胴部外面中ほどには縦ハケの後にタタキが施される。また、棺内には赤色顔料が塗布された痕跡が残っていた。

3は、二重口縁の甕の口縁片である。口縁端部に向けて大きく外反する。復元口縁径は50.2cm。2とは別個体であることから、墓境内に一緒に埋められていたものと推定される。土器の合わせ口付近を日張りとして利用されたのかもしれない。

IV. 東地区および周辺の既知の遺跡

1. 東高田(ひがしたこうだ)遺跡

長野川の西岸、東遺跡の南500mの独立した微高地上に位置する集落遺跡でその範囲は南北長200m、東西幅100mほどと指定される。遺跡の中心地区は昭和50年代に開発が行われ、発掘調査が行われなかったため、その詳細は不明であるが、農作業の折には多くの土器などが出土しており、旧地権者が採集された弥生後期の脚付甕を実見した。また、微高地西側の低地を試掘したところ弥生時代後期の土器包含層を確認した。さらに段丘南端部の発掘調査では古墳前期の土壌などが発見されており、微高地上に集落があったことは確実である。

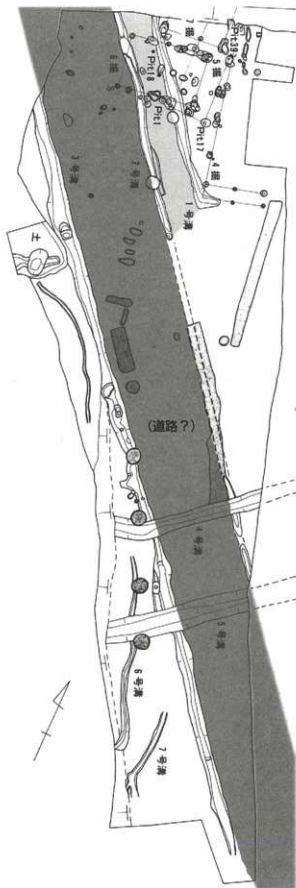
昭和63年に実施した北端部の発掘調査で弥生時代後期の3条の溝を確認した。溝は平行して60mほど続きさらに北に向かって延びていた。3号溝は幅は95cmほどで断面逆台形である。弥生後期前半の複合口縁壺、甕などが出土している。

ちなみに、この北西150mに位置する東ス町遺跡でも3条の溝が確認されている。この2か所の溝群は同一直線状に並ぶ位置関係にある。これらが本来、連続する一連の溝であれば、東遺跡と東高田遺跡をつなぐ道路の側溝であった可能性も想起され興味深い。

2. 東二塚(ひがしふたづか)壘棺墓

東地区を見下ろす二塚地区の丘陵上で、太平洋戦争中の宅地の拡張作業中に偶然発見された。棺口の大壘壘棺墓で、台は下棺を西に配し、主軸を東西に向けて発見されたという。

出土品のうち壘館の下甕と出土した副葬品が東京国立博物館に保管されている。下棺は砲弾形を呈し、底部は平底である。二条を一对とする突帯が胴部中央下に二対、口縁下のくびれ部に一对めぐっている。東五反田遺跡出土品に似ているが、底



第19図 東高田遺跡第3地点の遺構配置図(1/250)

部の平底がしっかりと残っていることや、胴部の突起帯がしっかりと作られていることから、東五反田甕棺に先行するものである。

棺底には大量の水銀朱が副葬されていたとみられ、棺内から出土したガラス釧、ガラス丸玉、ガラス管玉の表面にも水銀朱が付着している。

ガラス装身具の表面は風化し白曇化しているが未風化部分では本来の濃緑色を観察することができる。

ガラス製品は、化学分析の結果、いずれも鉛ガラス製であることが判明している。国内では希少なものとされ、藤田等氏は中国からの舶載ガラスを北部九州で再加工した可能性、さらには断面D型をなす特徴などから楽浪系銅鋳の影響の下に製作されたものと推定している。

東二塚甕棺墓は、長野川流域の平野部を一望できる絶好の丘陵上に立地し、流域における拠点集落である本遺跡群、東遺跡の両集落の中間地点でもあることや、水銀朱、ガラス釧をはじめとする豊富な装身具類を副葬していることなどから、被葬者は一集落にとどまらず長野川水系流域一帯を広範囲に掌握した首長と推定される。

3. 本(ほん)遺跡群

東高田遺跡の南にある段丘上に位置する集落遺跡である。現在の集落と遺跡の範囲が重複しており本格的な調査は行われていないため、その詳細はわからないが、概ね遺跡は径200mほどの範囲に広がるものと推定され、その中心は現在の白糸酒造一帯と考えられる。

遺跡の北端にあたる本田幸田遺跡では、1989年に行った発掘調査で古墳時代初頭の2基の小児用甕棺墓からガラス小玉が出土し、また、隣接する土器溜りの調査では青銅製鋤先や漆塗りの轆半島系容器蓋が出土している。

小児棺にも副葬品が納められる状況は、同期の甕棺墓で副葬品を有するものがなかった東地区の遺跡とは対照的である。小児棺に副葬品が納められた例は、井原ヤリミゾ遺跡の後期前半の墓群でも認められ、有力集落における階層分化の進行を示す現象ととらえられるが、伊都国内では終末になるとこの現象が拠点以外の有力集落にも波及したことをうかがわせる。

なお、ガラス小玉は径2cmほどの現状に纏られており、ガラス小玉の使用法を考える上でも興味深い。

4. 神在(かみあり)遺跡

東遺跡の北500mに位置し、長野川の氾濫原に突き出た微高地上に営まれた弥生後期後半の墳墓群で、ここからは長野川の旧河口をのぞむこともできる。

この遺跡から出土した甕棺について、原田大六氏が後期後半の甕棺の指標とし、その後も大神那博氏や橋口達也氏が詳細な比較検討を行った学史的にも重要な遺跡である。

正式な発掘調査は行われておらず、発掘の経緯を記した記録も残っていないため、遺跡の詳細が明らかでないのが惜しまれるが、地元の聞き取り調査などを行い、遺跡に関する情報の収集が必要であろう。

なお、近隣には当該期の集落遺跡は確認されていないことから、少し離れているものの、墓群の主体は東遺跡であったものと考えられる。

出土した甕棺は、糸島高校附属郷土博物館に保管されている。

5. 神在横(かみありよこばたけ)遺跡・釜塚(かまつか)遺跡

旧長野川河口右岸の宮地岳裾の谷間に位置する縄文時代～奈良時代の集落遺跡である。集落の詳細は明らかではないが、1996年の発掘調査で弥生中期～後期の土器とともに韓半島瓦質土器が出土した。

2001年には、釜塚古墳の周堤下で発見された土壙から瀬戸内海系の弥生土器なども出土していることから、海を介した対外交渉に関わった海浜集落と推定される。

6. 本林崎古墳

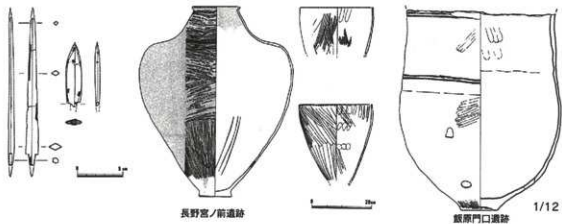
本遺跡群と、長野川を挟んで右岸に対峙する推定全長25mの前期の小型前方後円墳である。発掘調査は行われていないが、墳丘裾の箱式石棺から舶載内行花文鏡の破鏡(糸島高校附属郷土博物館蔵)が副葬されていた。長野川流域最古の前方後円墳と考えられる。

7. 真方C-1号墳

東遺跡群の東に長野川と対峙して立地する丘陵の頂に築かれた小型の古墳で、尾根線には数基の低墳丘の古墳が連なる。

調査時は円墳と考えられていたが調査区外に

飯原門口遺跡周辺

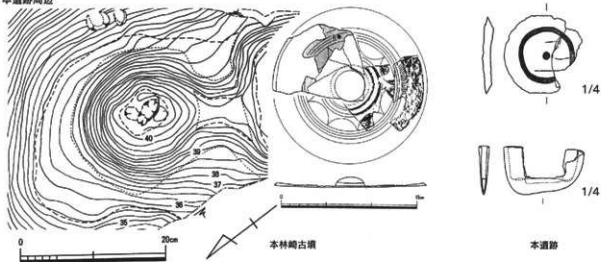


長野宮/前遺跡

飯原門口遺跡

1/12

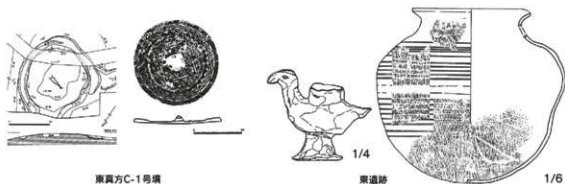
本遺跡周辺



本林崎古墳

本遺跡

東遺跡周辺

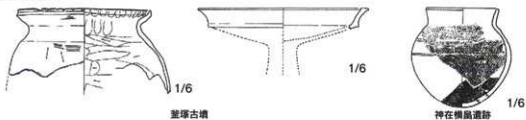


南真方C-1号墳

東遺跡

1/6

神在横置遺跡周辺



釜塚古墳

神在横置遺跡

第20図 長野川流域における地区ごとの特徴的遺物

続く周溝の形状から前方部の存在が想定されたことから、現在では小形の前方後円墳と認識している。後円部の箱式石棺内に方格T字鏡が副葬されていた。前期後半の古墳とされる。

東五反田遺跡の方形周溝墓や箱式石棺墓との関係については、東五反田遺跡の方形周溝墓→同遺跡箱式石棺墓→真方C-1号墳の築造順位となる。

V 長野川流域における弥生 ～古墳時代の地域構造(素描)

東地区および周辺の弥生～古墳時代前半期の集落、墳墓の調査概況を紹介してきたが、最後に長野川流域における弥生時代から古墳時代にかけての地域の様相を概観しておこう。

長野川流域では、東遺跡群の南に本遺跡群が、さらに上流域に飯原門口遺跡が立地している。各遺跡は2kmほどの間隔をおいて立地しており、いずれも弥生中期から古墳前半期にかけて共存していることから、長野川水系の当該期の社会は、この3集落を中心に展開したものと考えられる。

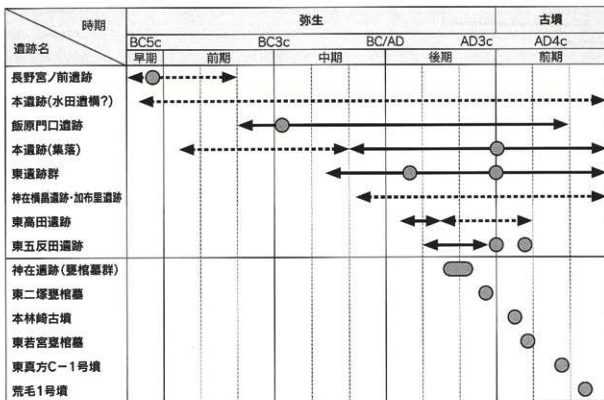
支石墓を含む弥生早期の墳墓が発見された長野宮ノ前遺跡は、飯原門口遺跡の一角に位置し、

さらに金海式甕棺墓群も出土していることから当地の弥生文化の定着はこの地を起点に展開されたものと考えられる。

その後、弥生中期になると本遺跡群が、さらに少し遅れて中期後半から後期初頭頃に東遺跡における集落経営が本格化した。

東地区の弥生～古墳時代の集落を比較すると、東高田遺跡、東五反田遺跡は規模が小さく、存続期間も弥生時代後期に限られる。これに対し、東遺跡では弥生中期後半～古墳中期前半まで継続して集落が営まれている。また、東高田遺跡、東ス町遺跡で検出した溝状遺構が道路の一部とすれば、東高田遺跡から東遺跡に向かって直線的に延びていることになり、両遺跡が道路を介して深くつながっていたことを推定させる。

また、東遺跡で出土した陶質土器や水鳥形土製品から、この集落が玄界灘を介して韓半島との対外交渉にも深く関わっていたことがうかがえ、経済的にも周辺他集落よりも優位にたっていたものとみられる。これらの状況から当該地域の集落群の中にあつて東遺跡はその中心的な集落であった可能性が高いと判断される。対外交渉の直接の舞台となつたのが、長野川河口に位置する神在横島



第21図 長野川流域の弥生～古墳時代前期における主要遺跡、古墳の消長

遺跡や加布里遺跡だったのではなかろうか。

伊都国域における大陸・朝鮮半島との対外交渉が本格化した弥生後期以後になると、長野川水系における主導権は下流の東、本遺跡に移ったものとみられ、特に本遺跡がその中心的な位置をしめたものと考えられる。集落において韓半島系の漆器や青銅製鋤先が出土する状況から、周辺の他の集落よりも地方的に優位であったことがうかがわれ、長野川流域最古の前方後円墳である本林崎古墳が本遺跡群の東岸に位置することも、本遺跡群の優位性を裏付けする。

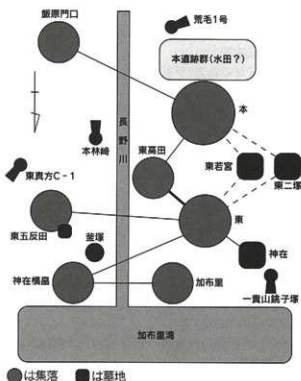
VI おわりに

長野川は糸島地方西部の主要河川であり、二千年以上の長きにわたり、流域の農業経営を支えてきた。現在では長野川流域にとどまらず、西の深江平野の農業水利としても整備され、貴重な水源となっている。深江平野において長野川の水がいつころから利用されるようになったのか、当地の歴史を考える上で興味深い課題でもある。

さて、一帯には、一貴山銚子塚や釜塚古墳など当地を代表する古墳が築造され、糸島地方の歴史を考える上で重要な地域であることは疑いない。

なかでも、東地区の遺跡群はこれら重要な古墳にも近く、これらの築造に浅からず関わってきたはずである。この地区の遺跡の調査成果の報告は当

地の歴史解明には欠くことはできないものである。現在、博物館が管理する資料はまだ少ないが、これらの解明を進めるためにも、今後、資料の整理にも取り組んでいきたい。



第22図 長野川流域における弥生～古墳時代前半期の地域構造



第23図 東遺跡太田地区上空から石崎遺跡群をのぞむ(昭和61年1月撮影)

[参考文献]

東遺跡群

- 宮井善朗「北部九州の漢鏡—後期の様相を中心に—」『倭人と鏡—日本出土中国鏡の諸問題—』第35回埋蔵文化財研究集会発表要旨1994年
- 橋口達也「東太田遺跡」今宿バイパス関係文化財調査報告書第 集 福岡県教育委員会 1984年
- 東五反田遺跡
- 前原市教育委員会『伊都—古代の糸島—』1992年
- 東高田遺跡
- 岡部裕俊「長野川流域の遺跡群II」前原町文化財調査報告書第33集 1990年
- 角浩行・林覚「本田孝田遺跡・東スス町遺跡」前原町文化財調査報告書第49集 1993年
- 東二塚遺跡
- 原田大六「日本最古のガラス」『糸高文林』第2号 1953年 福岡県立糸島高校
- 原田大六「日本古墳文化」筑摩書房
- 梅原末治「日本上古の玻璃」『史林』第43巻第1号 1960年
- 山崎一雄「日本出上のガラスの化学的研究」『古文化財の科学』1987年
- 藤田等「その他の装飾品 1 銅 ガラス銅」『弥生時代ガラスの研究』1994年
- 東若宮遺跡
- 野田純子「神在横島遺跡」前原市文化財調査報告書第71集 2000年

本遺跡群

- 角浩行 林覚「本田孝田遺跡・東スス町遺跡」前原町文化財調査報告書第49集 1993年
- 岡部裕俊「ガラス玉副葬の小形甕棺墓」『伊都国歴史博物館紀要第3号』2008年
- 神在遺跡
- 大神邦博「福岡県糸島地方の弥生後期甕棺墓」『古代学研究第53号』1968年
- 橋口達也「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書13」福岡県教育委員会1978年
- 神在横島遺跡
- 野田純子「神在横島遺跡」前原市文化財調査報告書第71集 1998年
- 岡部裕俊「史跡釜塚古墳」前原市文化財調査報告書第81集 2003年
- 本林崎古墳
- 岡部裕俊「井原遺跡群」前原町文化財調査報告書第35集 1991年
- 真方C-1号墳
- 角浩行「今宿バイパス関係文化財調査報告書」前原町文化財調査報告書第47集 1993年

糸島市立 伊都国歴史博物館紀要

第5号

発行日 平成22年3月31日

発行 糸島市立伊都国歴史博物館
〒819-1582
福岡県糸島市井原916番地

印刷 株式会社ディスジャパン
〒810-0041
福岡市中央区大名1-9-30 福岡観光ビル3階
TEL 092-712-0431



